

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 36 号

平成 17 年 4 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

新渡戸稲造「一日一言」より（3）

6 月 4 日

後世大ならんと欲せば、現世において小なれとやら。人に使われ人の用に立つことは、従僕奴隷の業のように聞こゆれど、これぞ人の最高の勤めにして、人の世に生まれたるも、人の御用を達すため。

我がためをなすは我が身のためならず

人のためこそ我がためとなれ

立ちよりてしばしなりとも習はばや

君につかふる人のところを

6 月 6 日

天は自ら助くる者を助くとやら、心願成就を祈るものは一身を捧げもって祈るべし。すなわち口に祈る事を身に行い、成就の期日はひたすら天に一任すべし。天は時を撰びて、各自の求めに応ずべし。

祈るとは心も身をも天地（あめつち）も

誠になれと神にまかする

大空の雨は分けてはそそがねど

うるう草木は己がさまざま

6月9日

今日は曇る今日は雨降ると、不平を並べ立てても空は晴れぬ。雨が降るなら、傘一本でわが行動は定まる。事に当たり、くよくよ呟(つぶや)きて我が望の叶うものなら、人生はねぼけ奴の現(うつつ)に過ぎぬ。事を決するは断行である。断じて行えば鬼神も避く。

なせば成りなさねばならぬものなるを

成らぬといふはなさぬなりけり

6月10日

寛永5年(西暦1628年)の今日、水戸黄門光圀卿が生まれた。卿の教訓にいわく。

苦は楽の種、たのしみは苦しみ種と知るべし。主人と親は無理なるものと思え。下人は足らぬものと知るべし。恩を忘るる事なかれ。子ほどに親を思え。子なきものにおじよ。酒と色とは敵と知るべし。朝寝すべからず。分別は堪忍なり。小なることに分別せよ、大なることに驚くべからず。九分に足らば十分にこぼると知るべし。

6月14日

客の面前で妻を叱るをもって接待の法と心得る人あれども、心ある客にとりては、これほど不愉快なる事はなし。これを歓待と思う客なら二度と交わる値なし、目下のものに荒々しく物いうをもって威光とするは豺狼(さいろう)の社会と知れ。古人も威あって猛(たけ)からずと教えたり。唳鳴(どな)りは動物の唳音(どおん)、威厳は優しき声に現わる。

6月15日

事繁き世に働き、朝夕人に接する間に忘れやすきは唯我独尊の大達観である。最愛の妻も子も親も兄弟も、畢竟（ひっきょう）すれば各自別々の存在なれば、親しみは深くも、使命天職は皆異なる。

おしなべて天上天下独り居て

ひとり尊き身とは知らずや

むつまじき親子だにも捨てられて

独りおもむく道と知らずや

6月21日

人は皆人たることを忘るなかれ。位なくも人は人、智なくも人は人、小前の者の人格を重んずべし。うるさいと思わん時も、女房、子ども、下女、下男の用なき言葉にも一応は応ずべし。人の言葉は心の発言、決して無視するなかれ。

あいあいと返事よければ睦まじく

心に不足あれば不返事

6月28日

近頃の草木の繁るを見ても、明らかに春の手入れの様子がわかる。夏の草取りに一層骨折らば、秋の実りは確かであろう。努力する際は効果いまだ見えずとも、後日必ず報いあり。

怠りも夏の稼ぎもほどほどに穂にあらはれて見ゆる秋の田

米蒔（ま）いて米がはゆれば善に善悪には悪が報ゆとぞ知れ

6月30日

何業につけても、七八分どおり終れば心に倦怠を生じ、厭気(いやけ)のさすものなり。学問しても、針仕事しても、政治上奔走しても、実業に従事しても、倦怠は精力の試金石。西賢の言に、「天才とは倦まずして働く力なり」と。

井を掘りて今一尺で出る水を

掘らずに出ぬといふ人ぞうき

7月1日

今年もはや半ば過ぎたれども、前半歳の歴史は敗軍の記事なれば、後半歳には見事取り返えすべし。これより速行を旨とすべし。善なり、義なりと認めたら直ちにその方針に進むべし。貯蓄が必要と認めたら、即日一銭の貯金せよ。学問が大事と思うたら、即日一ページ読書せよ。

東路(あずまじ)と言えば遠きに似たれども

ただ一と足の踏み出しにあり

千里ゆく道も初めは一と歩み

低きよりして高く登りつ

7月5日

季下(りか)に冠を正さず、瓜田(かでん)に鞆(くつ)を理(おさ)めずとやら、疑いを招くようなことはなさぬがよし。さればとて、怪しき風情の下にも、清浄潔白の素行あるを忘るべからず。

女郎花(おみなえし)多かる野辺に宿りせば

あやなくあだの名をや立ちなん

7月6日

間断なき努力は進歩の要件。動植物の進化をみても、途中にとぎれる例ははなはだ少ない。一度発心しただけにては進歩おぼつかなければ、日々発心の時を顧みて新たに決心を堅むべし。

掃けば散り払へばまたもちり積る
人のこころも庭の落葉も
払はずば心のちりも夏くさの
茂るままにや埋みはてまし

7月7日

地上にのみ齷齪(あくせく)するをやめ、祈りには目を空に放つべし、日月星辰は焚火(たきび)や提灯(ちょうちん)の代用品でない。日が照れば暑いとか、雲がかかれば寒いとか、月が出れば明るいとかいうにとどまりて、それ以上を知らぬは、これ天体の吾人に語る声を聞かぬ故である。

たなばたのまれの契りは名のみにて
つきぬまことの悟とぞ聞く
明治天皇御製
天の原満ちたる星の影消えて
月の光になれる空かな

7月11日

昔ギリシャのある天文学者は星辰の観測にふけり己の足元を忘れて溝に落ちしと。

行いは常識の軌道を外れざるがよし。足は地を離れぬように歩むべし。思慮は泥土に執着せず。天に向上するがよし。かくして高く大なる思想を、低く小なる言行に顕わすべし。

雲よりも上なる空に出でぬれば
雨の降る夜も月をこそ見れ

7月18日

母の愛ほど神の愛に近い愛はない。幾度歳を重ねても、幼き時の清き心に呼び返し、恩愛の真味を与えるうるものは母の愛である。憂きことしきりに来り、神も仏も我を捨つると嘆くときも、母の心ばかりは疑えぬ。親を思う心にまさる親心とやら、この心を汲むを孝という。仁愛の発起点はすなわちこれ。

何事も偽多き世の中に子を思うふのみぞ誠なりける

無き親を思ふ思ひを有りし世にもたばや今の悔やなからん

7月20日

知識には限りあり、専門家といえども、己が専門のことにつきて知らぬこと多し。智者は一を聞いて十を知らんなれども、十を知れば直ちに知らぬこと百出す。我知らずと感ずるは最高知識なり。

知らざるを知らずとするを智者と知れ

知らぬを知ると思ふこそ無智

磨きなば磨いただけに光るなり

性根玉でも何の玉でも

7月26日

理想の現実には遠き先にあらず、いつも手近にある。大事業も今日の今より始まる。大思想もこの時間に生まれんとしている。大決心の実行は明日を待たぬ。

いつの時いつの月日と思ひしに

今年の今日の今の只今

7月31日

交際は、もっと簡単にしたい。招待は山海の珍味の陳列でない。家庭を料理店に化すは浅ましい。貧富賢愚もその差を忘れて打ち解けるこそ真の交わり。衣服自慢や飲食を目的とする会合は、礼装したる烏合に過ぎぬ。交際は心おきなく話し合い、あるいは旧情を温め、あるいは新しき交わりを深むるを目的とし、衣食を離れて交わす情愛なり。

8月1日

勝敗は何れにあるやと問うたなら、賢者と愚者とは答が違ふであろう。馬鹿と狂人(きちがい)は負けても勝ったと喜べど、智者はそのとき負けたごとくにして永遠に勝つ。

負けて勝つ心を知れや首引きの

勝ちたる人の倒るるを見よ

8月4日

物の本末は転倒しやすし。月給や位が上がれば人間そのものが上がりたる心地す。名も利も末なり、本は人なり。努力の結果として昇進するは至当なれど、昇進せるの故に心昂ずるは人物の下落なり。金や位は人でない。金や位に心を動かす人が物に負けるに等し。

人多き人の中にも人ぞなき

人に為れ人、人となせ人

8月7日

同じ人をして匹夫（ひっぷ）にするか豪傑にするか、小人にするか君子にするか、どちらにも作り上げる力は、だれしも出会する落胆失望の時に起こる一決心にあるのである。最後の15分に来て、もうだめだと斃（たお）るるるものはそれきり。もう一つと立ち上がれば後はしめたもの。

弓も折れ矢もつきはつる所にて

さしもゆるさで強く射て見よ

8月9日

たとえわが身に苦しみあるも、口に出すべからず、顔にも顕すべからず。荷物によりては、二人で担いで便なるもあり、三人を要するもの、百人に分つべきものあり。然るに天の我に援けたる荷は、いかに重くとも、他人と割ってはかえって重量を増し、独り荷えば軽くなる。

重くともわが荷は人にゆづるまじ

担ふにつけて荷は軽くなる

8月11日

ただ将来々々と将来を期して一身を立てんと思うは、時の何たるかを知らざる業なり。将来は過去より始まり、今日もその中にあり、かえって頼みにする将来こそ程なく過去になり終えん。

後の世と聞けば遠きに似たれども

知らずや今日も其の日なるらん

今日見ずばくやしからまし山桜

散りも始めず咲きも残らず

8月12日

運は天よりも降れば地よりも湧く。しかし待つ者には来たらで、待たぬ者に来る。地は耕す者のために豊か、寝て秋を待つ者のために穀を与えず。天は自ら守る者を守りて、御守りに頼る者を守らず。

守るとは身を守るのが守るなり

身を守らねば神も守らず

8月14日

毎日そばにいるものは、慣れ過ぎて互いにわがまま勝手に挙動(ふるまい)す。夫婦の間にも遠慮あり。親子の間にも礼儀あり。己が生みても、子は己の作る者ではない。まして兄弟、夫妻に於いておや。日々同棲するものに対して、常に感謝と尊敬と喜悦をもって接すべきに、かえって遠きにこれを求むとは。

妻こふる鹿ぞなくなる女郎花(おみなえし)

おのが住む野の花と知らずや

8月17日

栄枯盛衰は夜の常態、人生の法則である。転んだものは立ち上がる、立ったものはまた転ぶ。倒れても勇気と忍耐を足とすれば、再興必定。これもまた人生の法則。

昇るかと思へばやがて降り竜

花火に似たる人の世の中

世の中は狂言綺語と思ふべし

昨日の旦那今日の駕籠(かご)かき